

~Dear Mom

学院祭が終わった11月末の事。思い返せば騒がしいことや大変な事も多かったけれど、やり遂げた充実感と、みんなとの繋がりを実感できたことが嬉しかった。そして、また日常が繰り返されると思われた、そんな日のこと。ホームルームの後、僕は緋紗子先生に呼び止められた。

「瑞穂さん」

「あ、緋紗子先生。なんでしょうか」

「学院長がお呼びですよ」

「どんな用事でしょう？」

「さあ……。あ…そういうえば、もうそんな時期ですね。行ってみればわかりますよ」

「??」

一体どんな用事だろう。僕はクラスの皆に「ごきげんよう」と挨拶してから学院長室に向かった。

コンコン。ゆっくりとドアを叩く。中からは学院長の声。

「どうぞお入り下さい」

僕は緩やかに、静かに、ドアを開ける。それが恵泉のたしなみ。

「失礼します」

挨拶の後、また緩やかに、静かにドアを閉める。学院長は執務中の様子だったが、僕を認めると、書類を片付けながら、こちらに目を向けた。

「いらっしやいましたね。瑞穂さん。学院祭はご苦労様でした」

いつも通りの穏やかな表情。

「いいえ、私も十分楽しませて頂きました。それで、どのような用件でしょうか、学院長」

「次の土曜日、瑞穂さんは寮にいらっしやいますか？」

「……特に用事ありませんし、学院祭が終わったばかりですから、寮でのんびりと骨休めをしようかと思っています」

僕がそう答えると、学院長は得たりと思ったのか、にこやかにこう言った。

「そうですね……。ところで、瑞穂さんは今のお部屋を、かつて幸穂さんが使っていたという事はご存知でしたか」

「はい」

「実は、少し言い辛くて今まで黙ってしまっていたのですが、幸穂さんが在学の頃……あの部屋で一人の生徒がお亡くなりになっているのです」

問い返すまでも無い。一子ちゃんのことだ。今まで笑顔だった学院長の顔が少しだけ曇る。

「寮の後輩からその話は聞いています。なんでもその方は、私の母をとっても慕っていらしたと」

まさか幽霊になって今でも校内をさまよっているなんて、とてもいえないけど。

「それはそれは健気で良い子だったので、高島さんは……。その高島さんのお母様が次の土曜日、瑞穂さんのお部屋にお伺いしたいとおっしゃっているのです」

え、一子ちゃんのお母様が？

「そ、そうなのですか」

「はい。実は高島さんの誕生日が11月24日なのです」

そういうえば前に奏ちゃんや由佳里ちゃんと占いの本を見ていた時、一子ちゃんが「私の誕生日は11月24日なんです」って言っていた。でも……それって今日だ。昨日から由佳里ちゃんが「とびつきり大きなケーキを作ってますよっ」って張り切っているし、今日は一子ちゃんのお誕生会をする予定なのだから。「今日は11月24日ですよ。何故誕生日当日ではなく、次の土曜日なのですか？」

「今の時期、学院祭があることをご存知ですし、こちらが忙しい中にいらしても迷惑がかかってしまうとお考えなのでしょう。それに平日ではなかなか都合がつかないでしょうし」

きっと細かい日程まではわからないのだろうし、もしかしたら学院祭が終わった後でも数日は後片付けやなにやらで忙しい事をご存知なのかも知れない。

「そうですか。それでは、私はかまいませんとお伝え願えますか」

「わかりました。そう伝えておきますね。それにしても……」

「なんででしょうか、学院長」

学院長は少しだけ笑いながらこう言った。

「高島さんのお母様は幸穂さんとお会いになったことがあるのですよ。瑞穂さんを御覧になったら、驚かれるかもしれませんね。ほんと、幸穂さんにそっくりなのですから、瑞穂さんは」

あははは……ちよつと複雑。でも、一子ちゃんには最高の誕生日プレゼントになりそう。僕は、一子ちゃんが喜ぶ顔を想像しながら帰途についた。

「瑞穂ちゃん、何ニヤニヤしてんのよ」

と、まりやにからかわれながら。

\*\*\*

その日の夜。

部活だった奏ちゃんや由佳里ちゃんもいつもより少しだけ早く帰ってきて、一子ちゃんのお誕生会の準備が始まった。本当は皆で何かプレゼントをしようと思っていたのだけれども、幽霊は服も着れないし、アクセサリーだって身につけられないし、そもそもプレゼント自体に触れない……ともかくお誕生会だけでもということ。

「あ……お祝いしていただけるのは大変嬉しいのですが……私、死んじゃっているんですけど……よろしいでしょう

か？」

いや、それはそうなんだけどね。するとまりやは飲み物のコップを並べながらこう言った。

「それを言っちゃ元も子もないよ、一子ちゃん。お誕生会なんでもんは、誕生日にかこつけて皆が楽しめれば、それでいいの。如何にも『お祝いしてあげるんだから感謝しろ』って感じがするお誕生会よりはずっと良いでしょ」

そうか。確かに一理あるかも。

「それに私達にとつて一子さんは生きている人と何もかわらない大切なお友達なんですから、お祝いくらいさせてください」  
そう言いながら由佳里ちゃんは自作のケーキを厨房から持ってきた。綺麗に飾り付けされたイチゴのショートケーキは本職顔負けの出来栄え。しかも結構大きい……。4人で食べきれるのかな……。

「ねえ、由佳里ちゃん。そのケーキ、少し大きくはないかしら？」

「あは。そうなんですよ。本当だったら4号か5号くらいで良いんですけど、寮のオーブンって大きいから7号の型で焼いちゃいました。でも大丈夫です。一子さんのお祝いには丁度いくらいです」

あの……なにか丁度良いのか、全然理屈が分からないのだけど……。

「そうなのですよ。せっかく由佳里ちゃんが心を込めて作って

くれた、いちごさんのショートケーキなのです。生クリームタップリでふわふわで、おつきくて、とっても甘々なのですよ」  
☆

奏ちゃんは一子ちゃんのお祝いよりもショートケーキの方が楽しみな様子。目が輝きすぎてお星様が散っているし……。

「でも、私は幽霊ですからケーキも食べられませんし、ローンクもふっつて消せませんし、そもそも死んでから二十二年も経っているからやっぱりローンクは三十本オーバーで三十路どころか四十路間近の危機ですかっ!! てな感じで、出来ればその分は勘弁していただきたく、しかしながらそれはそれで永遠の女子校生？ ヤッホーこんちくしょう……で……あの……よろしいのでしょうか……私なんか皆さんに祝って頂いて……」  
「だから、いいって言っているでしょ。あたしたちが祝いたいんだから、素直に祝ってもらうのが筋ってもんよ。ケーキはね……ほら」

そう言つて、まりやは僕を指差した。あ、そうか。イチゴ大福の時と同じで、一子ちゃんに体を貸してあげればいいんだ。

「私？ うん。いいけど……」

一子ちゃんにイチゴ大福を食べてもらった時には、少しばかりダイエツトしなくちゃなあって思ったものだけど……。まあ、こういう場合、仕方ないよね。

「お姉さま、よろしいのですか？ほんつと~~~~に宜しいんですか？ 私つてば嬉しさにかまけて見境無く食べちゃいま